

I. 大智度論所収の述婆伽説話

『大智度論』が元来大品般若の注釈であることは既知のことであるが、仏教説話研究者にとっても見逃せない面がある。それは哲学的議論の例証として多数の物語を引いているからである。近時同書所収の一説話に言及されることが偶然ながら相次いだ。

渡部美穂「『宝物集』不邪淫の項に引かれた術婆伽説話」『宝物集探求』1 (2010), 23-30. 本論文は表題の様に『宝物集』所収の説話から出発し、その典拠を求めて、『大智度論』の相応する一話 (大正蔵 25.166a-b) を読解したものである。本論文の少し前に

西村正身「落語「西行」源流考」『作新学院大学紀要』19 (2009), 81-104.

という論文があり、西行出家譚の淵源を多数の文献を博搜して探る中で、正に『大智度論』の同じ物語に言及し和訳も与えてある。渡部さんはこの論文にも目を通し、自分でも現代語訳を与えている。屋上屋を架す様な作業であるが、渡部さんは既存の訳に満足しなかったから、そうしたのだと思われる。両者を比べると多々異なる部分があるからである。ただ新訳の制作者は控えめな性格であるらしく、自らの制作の意図は述べず、また自分の訳と先行の訳の違う所を殊更に注記するというをしなかった。渡部論文の主眼が『宝物集』所収話の成立を論じることにあるので、その措置は奇異のことではない。ただし先行する訳をすべて列挙する周到さを備えながら、新訳の意義を強調しなかったことは勿体ない気がしないでもない。渡部さんは4種の訳を列挙し、実質的には2種に収斂されるとしている。すなわち4種とは (1) シャヴァンヌ (2) ラモット (3) 三枝 (4) 西村であるが、(2) (4) はそれぞれ (1) (3) を踏襲したものである。渡部さんは書き下しの類は翻訳とは言い難いとして省略してしまった。しかし筆者は近年書き下しというか訓読の意義を再考しつつあるので、記録の意味も兼ねて記しておこう。

『國譯大藏經』論部1 (東京：國民文庫刊行會, 1919), 534-535 [山上曹源].

『昭和新纂國譯大藏經』論律部3 (東京：東方書院, 1930), 467-468 [三井晶史? ].

『國譯一切經』釋經論部1 (東京：大東出版社, 1935; 改訂 1977), 三七九 (395) -三八〇 (396) [眞野正順].

以下には (3) の和訳を軸に検討を加えよう。冒頭の数字は (3) の頁・行を指す。

~~~~~

137.17 拘牟頭[サンスクリット不明]: 三種の書き下しは原サンスクリットとして Kumuda を脚注に与えている。シャヴァンヌは漢字の転写だけであるが、ラモットは括弧で包んで Kumuda を挿入している。ここは女性の名であるので、もしこの形を与える

のであれば、Kumudā としなければならない。述婆伽の原語はいずれも与えていないが、Jīvaka であろう。

137.17 魚をとる魚師：馬から落ちて落馬した的表現。漢文は「捕魚師」であるから、渡部訳の「漁師」が適切。シャヴァンヌ pêcheur.

138.2: 想像をめぐらして: 漢文「想像染著」王女の姿を思い浮かべることに取り憑かれて、心はそれを暫しも捨てることができなかつた、ということ。

138.7 私は心に願望んで: 漢文「我心願樂」の願樂(がんぎょう)は文字通りの願いのこのむこと、また知ろうと欲することというのが普通の意味であるが、中辺分別論釈の adhimukti という対応をも参照すると、女性を思い焦がれる苦しい状況から解き放たれて、という意味も考えられる。シャヴァンヌの Je voudrais pouvoir me distraire もこの考えに基づく訳ではないだろうか。

138.9 肥った魚のおいしい肉を: 日本語の語感としてひっかかるものがある。漢文「肥魚美肉」は二種のもものが並列されているのであろう。美の字には鳥の異読があり(宋元明宮石)、この場合には並列しかあり得ない。ただし書き下しでは解釈が分かれている。「肥へたる魚の美肉を」(昭和)「肥魚の美肉を」(訳一)「肥へたる魚鳥の肉を」(訳大)。シャヴァンヌ de gras poissons et de la viande excellente.

138.12 まさに心からの情をこめて申し上げたいと存じます: 漢文「当以情告」はすこし前の「以情答母」(166b4)と同じ構文で、心のうちのありかたをお話しいたしましょう。シャヴァンヌ qu'elle lui esposerait ses sentiments.

138.13 情欲が難しくむすばれ、病気となりました: 少なくとも筆者には理解が難しい日本語である。漢文「情結成病」は、想いが募ってとうとう病気になりました。シャヴァンヌ sa passion est si forte qu'il en est tombé malade.

139.5 王はいいました、「それは大いに善いことだ。」: この訳は正確である。漢文「王言大善」。シャヴァンヌ Le roi y ayant consenti は意識である。

139.9 王は世界の主である: 漢文「王為世主」世に施という異読がある(宋元明宮)。ラモットは括弧付きで dānapati を挿入しているが、この異読に基づいたものである。そうでなければ lokanātha が挿入されるべきである。

139.10 そこでこのひとをきらって: 漢文「即厭此人」。書き下しは「即ち此の人を厭つて」(訳大)「即ち此人を厭うて」(昭和)「即ち此人を厭ひて」(訳一)とあり、厭の解釈は表には現れてはこない。渡部さんは「圧迫して」としたが、飽きさせて、すなわち退屈させて眠らせてしまった、ということであろう。シャヴァンヌは Aussitôt donc il accabla de fatigue cet homme とあり渡部さんはこれに依ったのであろう。

139.11 重くこれを推しましたが: 日本語になっていない。漢文「重推之」の重はおもくではなく、かさねてである。書き下しはいずれも「重く」となっているが、渡部さんの「何度も揺り動かしたのですが」がよい。シャヴァンヌ elle le secoua à plusieurs reprises.

~~~~~

三枝訳は伝統的な書き下しを離れて、こなれた現代日本語訳を作成しようとした試みでその意図は高く評価される。しかしやはり書き下し、なかんずく訳一に強く寄りかかり、そのために不適切な箇所を残してしまった。このあたりはシャヴァンヌを参照すれば随分と改良される筈であるが、それにしても一世紀近くも前のフランスのシノログのレベルの高さには驚嘆される。同じ東アジア文化圏に属する私たちは襟を正さざるを得ない。

P.S. 伊藤丈『大智度論による仏教漢文読解法』（東京：大蔵出版、2003）という入門者用のツールがあり、大智度論講読を志す初学者の欠かせない参考書になり続けることが予想されるが、前述のフランス東洋学の成果は参照されていないので、全面的な再検討が必要であろう。

## II. 『唐話纂要』所収「常言」研究序説

ここでいう〈唐話〉とは江戸時代に長崎を窓口として接していた当時の現代中国語である。日本人の得意としていた訓読による文言読解とは関連はあるものの、相当に異なるものであり、支那学をこととする者の中には荻生徂徠の様にこれを学習し、伝統的な漢学と合体させねばならないと考えた者もあった。今日の訓読排斥音読推奨論者と並行的な面がないでもないが、この近似性についてはなおきちんと考察する必要がある。また江戸時代における明清の白話小説の受容と流行も、唐話学習熱に拍車を掛けた。白話文は伝統的な訓読方法では読み切れないからである。こうした状況下で唐話学習のためのツールが続々と現れた。主導的な地位を占めたのは唐話の達人岡島冠山であったが、『唐話纂要』はその著書群の一つである。初めにお断りしておかなければならないのは、筆者は膨大な文献を要する唐話については全くの門外漢であり、また小稿の以下に述べる多々の事情により、正しくそれに向き合う資格をも欠いている。ここに若干の言を弄する所以は、同書に含まれる「常言」が日本語諺の用例に追加すべきものを含んでいることに遅まきながら気が付き、paremiologistとしては看過できないと感じた。今日の中国語諺に白話小説中に含まれる多くの成句が初出用例となっているらしいことを漠然と感じていたが（松村 2009）、実は同類の水源から日本諺へも流れ込んでいたことが同書の常言の項を瞥見することにより予想された。この予想は常言の項の綿密な注解を作成する作業を通じて証明へと昇格させねばならないが、それへの基礎作業としての学習記録が以下のものであり、またそれ以上のものではあり得ない。

### 1. 複写にいたる経緯

#### 1.1. 語学書中の諺例文

本年夏に従来全く言及されてこなかった本項の読解をことわざ学会例会での輪読の材料とすべく、『唐話学習書に引かれた中国諺——『唐話纂要』常言の項影印——』（=プリ

ンス通信・Beiheft 103) (Materialia Paroemiologica XXXIV) (=Bibliotheca Scriptorum Classicorum Omegiana IV) (Tama: Omega Verlag, 2010) を private circular として作成した。岡島冠山『唐話纂要』の常言の項<sup>1)</sup>の影印を軸とし、小稿の基となった文章を巻末に添えたものである。岡島冠山は江戸時代きっての名通訳で、同時代の中国語を自身があやつり、且つ教育普及用の学習書・語学書を著している。岡島の業績については、日本漢学・中国語学史で語られることがたびたびで、ここでは繰り返さない<sup>2)</sup>。

語学書の例文に諺が用いられることはしばしばであるが、唐話も場合も例外ではなかった。岡島の初期の著作である『唐話纂要』にも常言の名の許に、142の成句が列挙されているが、その大半は諺関連のものである。我々は江戸中期に知られていた漢語諺の一端を理解するために、この部分の解説と翻刻並びに注記の作成を目指して輪読を開始した<sup>3)</sup>。

実は江戸時代の中文直読には関心はあったものの、資料も多く、また専門的な論文ばかりで、門外漢にとっては入りづらい部門であった。ことわざ学会では2010年7月10日(土)に法政大学教授千野(せん)の明日香先生をお招きして、「中国のことわざをめぐって」という題でレクチャーをして頂いた。お話しの内容は多岐にわたり、予定していた時間ではとても収まらないほどの豊富さであったが、その中でとりわけ印象的であったのが、『唐話纂要』中の常言の項の紹介であった。レクチャーの折に配布されたものには巻三、十二ウが複写されていたが、そこには「送君千里終須一別」が掲載されている。この諺は同教授の近著『中国のことわざ』(=あじあブックス 068) (東京:大修館, 2010), 70-71 に採り上げられているものである<sup>4)</sup>。この御紹介に刺激されて、常言の項を一読したが、漢語諺を自由

- \*1 『唐話纂要』の他の冠山の唐話ツールである『唐音雅俗語類』『唐訳便覧』『唐話便用』を閲しても、諺関係の列挙が見られるのはこの箇所だけである。更に他の資料を調べれば、更に諺資料を追加できるかもしれない。
- \*2 古くは石崎 1940: 54-142 に概観が与えられ、近年では奥村 2007 が冠山に焦点をあてて論じている。また高島 1991: 49-71 は水滸伝関連で冠山に言及している。同書は日本漢学界における冠山の微妙な位置についても記述している。
- \*3 諺には文言の成句がそのまま踏襲されているためか、唐話の語彙研究・シンタックス研究からは除外されているので、この項だけを扱うのはそれなりに別の意義があると思う。Cf. 「巻三の常言は諺や慣用句なので、対象外とする」(奥村 2007: 25) なお輪読の第一回目は2010年8月8日(日)にことわざ学会と大妻多摩諺研究会の共催になる「ワークショップ: 世界諺の諸相」のプログラム中の6番目に筆者が担当者となって行われた。なお2番目に「洪日対照諺集の編纂について 付・日本語諺のローマ字化と語釈案」という大妻千鳥会のサポートを得た画期的な研究プロジェクトの報告が佐藤弥さんによってなされたことも付記特記しておきたい。
- \*4 『英語教育』Vol.59 No.4 (July 2010), 93 に同書に対して筆者による書評があるが、元々は「ことわざ掲示板」(<http://8728.teacup.com/pinetreedyummy1105/bbs>) に連載したもので(2010年 3月14日～27日)、雑誌掲載のものは極端に短縮化したものである。掲示板には過去ログ集が付随しているが、この部分の出版は目途が立っていないので、書評部を若干整え AnalSer III として呈示しよう。

に取り込んでいる日本諺の研究にとっても重要な資料であることを認識した。現今の江戸時代の諺を研究するにあたって、こうした視点は殆ど欠落していたと言ってよい。この点からして、この資料を整理し、索引も付して今後の研究に資することは急務であると考えたわけである。この機縁を与えてくださった千野先生には甚深の謝意を表したい。

## 1.2. 唐話と白話文

個人的な事情も記しておきたい。筆者は数年前に白蛇伝の研究に手を染めたことが機縁となって、伝統的な訓読以外の漢語文の読解法について関心を寄せていた。明清の白話小説は既にその言語が文言とは異なっているので、既存の訓読法では読み得ない<sup>\*5</sup>。しかし明清の白話小説は江戸時代に盛んに読まれていた。江戸時代の読者は訓読法以外の何らかの手段を持っていた筈である。すなわち唐話は白話文と同時代の中文であったようである。唐話は口語文であり、白話は文章語であるという違いはあったかもしれないが、とにかく文言と比べれば同種と言ってよいものである。白話小説の解説には、唐話通事が大いに寄与した筈である。例えば『水滸伝』読解のためのツールがいくつも編纂されている。この『水滸伝』には大正期になって平岡龍城が訓点のみならず、不思議な傍訳を付けたものを公刊している<sup>\*6</sup>。白話小説に対しては通常の訓読では処理できないものが多すぎるので、その措置は首肯されるものであるが、平岡の創始かどうか関心のあるところであった<sup>\*7</sup>。その後、江戸時代の水滸伝へのツールを知り、読解法は同一ではないものの、その発想はここに淵源することが了解された。

諺は文言文、(もしかしたら文言当時の)口語文、白話文、現代中国語文が混在しているので、その読解は必ずしも容易ではないが、現代にあって唐話通事の助力を得て常言の読解を進めることには、漢語諺の理解を益すること大なるものがあると思った次第である<sup>\*8</sup>。

\*5 日本人と中文との関わりは、六角・横山 1975: 29-103 に概観できる。更に簡便なものとしては、王・名和 2006 がある。

\*6 『標註訓譯水滸傳』平岡龍城訳(東京:近世漢文学会, 1915)。なおこの書は言及されることが乏しかったが、高島 1991: 316-325 により高く評価されている。筆者は柴田天馬の『聊齋志異』の訳文を初めて見た時に奇異の念に打たれたが、今となってはこの方式はこのあたり、ひいては江戸時代の唐話関係者にまで繋がり得ることが予見できる。いずれ伝統的訓読以外の日本の中文処理法の流れについてまとめる機会が得られれば幸いである。

\*7 『國譯漢文大成』の文學部 14-16 (東京:國民文庫刊行會, 1921-22) は紅樓夢である。この巻は他巻に見られる訓読文とは違って、現代語訳が与えられている。訳者として幸田露伴と並んで平岡龍城の名が見える。白話小説の処理についての訳者の見識が伺える巻である。このことは「ことわざ掲示板」でも述べたことがあるが、『國譯漢文大成』中の日本語は伝統的な訓読文ばかりである、といった嘘の発言があるので(e.g. 今村与志雄『魯迅と伝統』[東京:勁草書房, 1967], 503; 高島 1991: 318)、それを正すためにも再度強調しておきたい。ただし高島 1991 には紅樓夢は幸田・平岡の共訳となっているが、実際には平岡の単独訳であること、同じ大成の水滸伝の方が露伴により訓読式のものを作られた経緯が指摘してある。

\*8 白話小説中の諺が果たした役割については、松村 2009 を参照。

## 2. 複写される資料

### 2.1. 版本と影印本

『唐話纂要』長崎處士岡寫援之衆

[初版] 享保元年(1716)刊。五卷五冊。

[再版] 享保三年(1718)刊。六卷六冊。

再版の五巻までは初版と同内容で、第六巻が付加部分である。第六冊の表紙の題簽に「和漢奇談」と記されており、ふたつの物語が、唐話と日本語訳で収められている。前五巻が単語・句・長短話・小曲に限られていたので、読本部を付加して学習書としての体裁を整えたものと思われる。

両版共に影印版があり、容易に参看できる。

五巻本：『中国語教本類集成 補集』江戸時代唐話篇 第一巻 一 唐話纂要 東京：不二出版, 1998.

六巻本：『唐話辭書類集』第六集(東京：汲古書院, 1972), 1-300.

我々が関心を寄せる常言の項は巻三、十一オー廿一ウに見られるので、いずれの版を見ても同じである。ここでは鮮明さと判型の大きさから、前者が使いやすいのでそれを使用した。

### 2.2. 複写にあたっての処置

原本は袋綴じであるため、丁数を示す数字は折られていて判読が困難である。従って左右のマージンに、一オ、一ウ、二オ、二ウ・・・を記入した。

常言は出現順に通し番号を付け、その数字を下のマージンに記した。この処置により、格段に利用し易くなったものと信じる。

## 3. 『唐話纂要』の唐話常言の呈示方法

中国語原文は大ポイントで印刷され、右側に音読するために片仮名で中国音が記されている。唐話通事はこれによって、中国人とコミュニケーションしていたので、誠に重要である。この中国音の基を同定することは重要な問題であるが、これについては後述する。

漢字部分には旧来式の訓点・送り仮名・漢字熟語を指示するハイフンなどが付せられているので、その部分だけは和刻漢文文献と変わるところはない。しかも成句の大半は古い表現がそのまま踏襲されているので、訓点・送り仮名に基づいて訓読文を作るのは容易である。その後割注の形で日本語訳が与えられている。原文に即した訳もあれば、意味内容を取った解説的なものもある。これらのうちのいくつかは日本語諺としても用いられているものもあるから、日本語諺の準資料として書き留めておくことは意義がある。

このように、原文・音読・訓読・和訳とあるのは、前述の平岡龍城の水滸伝につながる面があり、またひいては現今の漢文の解説書にもつながるものである。

### 3.1. 句読法

唐話資料に中文・日文に句読点が用いられている。これについては何 2007 の研究があるので、その結論だけを参照しておこう。我々が扱う常言の項には四声点是用いられず、漢字の右脇に添える大きな白丸もなく、小さな白丸のみが用いられている。中文に添えられる白丸の位置には、行の中央・行の右側と二つが見られるが、句点と読点といった区別を示すものではない。筆者の見るところでは、二つの位置を意識したものではなく、前後の漢字の形のために中央に置きにくい場合にやや右にずれているだけの様である。従って、白丸は行の中央に打たれ、今日の句点と読点の両方の役割を担っていたものと見なされるべきである<sup>9)</sup>。何 2007 はこの主題の唯一の業績であるが、唐話資料にあっては、各資料の用法も同一ではなさそうなので、更にレベル分けをした記述が望まれる。

日文中では右側に白丸が打たれる。句点と読点の両方を兼ねている。

### 3.2. 半濁点

ハ・ヒ・フ・ヘ・ホの半濁点は問題ないが、モ・ス・サに付せられた白丸はその機能が不明である。規則的に用いられているようであるから、何らかの意味を持つことは予想されるが、拗介音を反映しているのかなと想像はするものの、その実態は現時点では明らかにすることはできない。

## 4. 読解のための作業

音読用の片仮名は取り敢えず後回しにする。巻五までは声調に関わる記載は一切ないが、巻六の漢語原文の漢字には各漢字の四隅に点を打って示してある。しかし唐音の声調を観察して記述した結果ではなく、広韻のそれを示したものである。つまりは今日漢詩を作る人が参照する詩韻譜と変わらない。実際の声調でなく、理念的なものである。こうした理由から発音関係は後回しにするのが適当である。

本文の解読では、先ず訓点に・送り仮名に基づいて機械的に作成した訓読文、それと割注の和文の翻刻が必要とされよう。

## 5. 本文の位置づけ

与えられている見出し本文は概して短いし、時には文として完成していない句のこともあるので、文言であるのか、白話であるのか、はたまた口語体であるのか判定することは用意ではない。常言には様々なレベルのものが混在しているので、語彙・語法研究の先行研究ではこの項は除外されている。そこで次善の策として、【注】にて諺・成句ツールに参

<sup>9)</sup> 白丸を行の傍らに打つと句点、中央に打つと読点、という区別を太宰春台が教えている。『倭読要領』巻下、二オウ (= 勉誠社文庫 66) 東京：勉誠社、1979)。何氏が実質的に意味をもたない区別を見たのは、春台の言に影響されたためであろう。

照させて、登載されているものはその所在を記す。ツールの数は膨大であるので、取り敢えずの暫定的処置ということで次のものに限定する。

大全 = 温端政主編『中国諺語大全』上下 上海：上海辞書出版社，2004。[例えば II.32 は下巻32頁を指す]

朱志 = 朱介凡『中華諺語志』十冊＋索引 臺北：臺灣商務印書館，1989。

鎌米 = 鎌田正・米山寅太郎『故事成語名言大辞典』東京：大修館，1988。

大全には文言・白話・現代語のものが収録されているので、下巻の用例出典を確かめなければならぬ。その意味で用例の出典を転記することが肝要である。鎌米にあれば、それは文言ということである。

## 6. 振り仮名から見た唐話

前述の通り、常言本文に右側には音読用の振り仮名が付せられている。常言に限らず、唐話語学書類は殆ど音読用の振り仮名を伴っている。直読を推進していた荻生徂徠の一派はこの音で読んでいたことになる。この振り仮名がすべてにわたって一貫性を持っているか否かは唐話辞書類をすべて精査しないと確定的なことは言えないし、我々の関心は常言のみに向けられているので、今は暫定的に常言の項のみから、僅かに推測を進めるに過ぎない。

### 6.1. 唐話音についての先行研究

岡島冠山の唐話についての最も包括的な研究である奥村 2007は音については全く触れていない。岡田 1999は『唐話纂要』の二字話部の語彙を整理し、今日の中国語の併音字母で転写したものを対照させた業績であるが、唐音と北方官話は直接の関係がないので、唐話の振り仮名の原語を考える上で役に立つものではない。林 1988は振り仮名を中古音の音系の枠組みにあてはめていった労作で、仮名書きと中国音の対応を考える上での基礎資料を提供している。高松 1985, 1985.7, 1986 は漢字音の専門家の論考であるだけに微細な点にまで議論が及んでいるが、仮名書きの原語に呉語を想定しているようなニュアンスが濃厚である。ところで『唐話辞書類集』を編纂した長澤規矩也氏は各巻の解題に、振り仮名は江南音を写したものと解説している。江南は字義的には長江の南岸地域を意味するが、実際には蘇州・無錫・嘉興などを指すことが多く、そうであれば江南音は呉音を指すことになる。ただ長澤氏がそこまで考えていたかどうかは不明で、大雑把に北方ではなく、南方といった程度の意味で使っていた可能性もある。

中田喜勝氏は江戸時代に中国音が南京音と呼ばれていた事例を紹介し、次の様に述べている。

しかし、実際は今の南京地方の音ではない。・・・(亀井南暎の『我昔詩集』には)南京音の話された場所が上げられているが、いずれも当時の浙江省の都市名であって、現今の南京は含まれていない。要するに所謂南京音とは杭州を中心とした当時の浙江省

の音を指しているのであり、むしろ今にして之を呼ばば「江南音」とでも称する方が妥当である。(中田 1978: 218)

唐話の原音を特定の漢語方言に同定した発言であり、また図らずも長澤氏の江南音という言い方と一致している。

江南音という言い方は影響力があったと見えて、次のような発言もある。

一口に江南音といっても広いし、充分妥当性をもったものとしての精査が必要である。ここにみられる音がどれほどまでに地域限定することが可能であるかは呉方言との比較検討をはじめとして今後に残された大きなテーマであると思われる。(岡田 1999: 79)

唐話の基盤が呉語であるという先入見が形成されていたようであるが、虚心坦懐に振り仮名自体に立ち戻って観察することは必要である。

## 6.2. 声調

『唐話纂要』では常言の項のみならず、大半の音読仮名書きには声調は顧慮されていない。唯一の例外は再版の第六巻に含まれる読本であるが、ここでは漢字の四隅に四声点を打って声調の指示を与えている。しかしこれは中古音の声調を示したものであり、現実を反映したものではない。他巻の語彙集が実際に中国人から採集したと思われるが、この巻だけは小説を読本として採用したために基本的にはオーラルなプロセスが無かったのである。振り仮名を付けるにあたり、中国人に音読してもらったことはあったかもしれないが、声調を厳密に観察する考えは初めからなかった模様である。入声点は付けてはいるものの、振り仮名には閉音節であることは反映されていないことも、それを証する一例であろう。従って小稿でも声調は一切顧慮しないこととする。

## 6.3. 唐音を呉語とすることへの疑問

日本語の仮名表記は音節表記である。日本語は世界の言語のうちでも音素の数は少ない部類に属し、従って音節数も少ない。だから音節数の多い中国語を表記するには不便な言語であり、特に声母と韻母にわけて考えた場合韻母の方はとりわけ不利である。しかし唐話学習書にはそれなりに注意を払って仮名書きを添えているようである。そこでまずは声母から見てゆこう。中古音の牙音は一部口蓋化されることがあるが、牙音がカ行字で写されている例を常言の項から拾ってみよう。北方官話で口蓋化されず牙音が保たれているものは除いた。括弧内の数字は影印版に付けた通し番号である。

### 【表1】

喫キ (1, 9, 12) 驚キ (1) 家キヤア (2, 16, 51, 54, 55, 71, 96, 110, 114, 116, 123, 127, 132)  
錦キン (6) 其ギイ (13, 40, 77, 79, 102, 134) キイ (19, 77) 膠キヤ・ウ (23) 禁キン (28)  
見ケン (31, 50, 72, 79, 86) 近ギン (32, 133) 君キユン (33, 35, 36, 84, 134) 計キイ (43,  
64, 77) 降キヤン (44) 嫁キヤア (45) 勸キエン (49) 旧ギウ (50) 慶キン (54) 勤  
ギン (59) 較キヤ・ウ (64) 駕キヤア (66) 結キ (67) 饑キイ (73, 99) 九キウ (77)

教キヤ・ウ (80) キヤ・ウ (80, 97) 己キ、 (82) 俱キユイ (89) 傾キン (89) 決キエ (90) 強キヤン (93, 130) 舉キユイ (95) 谿キイ (98) 驕キヤ・ウ (100) 氣キイ (101) 窮ギヨン (105, 139) 金キン (107, 114, 136, 138) 徑ケイ (108) 戒キヤイ (117) 經キン (118, 128) 居キユイ (119) 輕キン (124, 126) 鑑ケン (125) 今キン (130) 救キウ (133, 139) 飢キイ (138) 敬キン (140)

以上を声母と振り仮名別に整理すると次の様になる。

【表2】

見母キ：驚 家 錦 膠 禁 君 計 降 嫁 較 駕 結 饑 九 教 己 決 舉  
驕 金 戒 經 居 今 救 敬

見母ケ：見 徑 鑑

溪母キ：喫 其 勸 慶 傾 谿 氣 輕

群母ギ：其 近 旧 勤 窮

群母キ：俱 強

あとカ行ではないが疑母の字を拾うと次がある。

疑母ニ：迎ニン (110)

試みに今の字の諸方音を北京大学中国語言文学系語言学教研室1995:19から転記すると次のようになる。

【表3】

北京 tein 濟南 teiē 西安 teiē 太原 tein 武漢 tein 成都 tein

合肥 tein 揚州 tein 蘇州 tein 長沙 tein 南昌 tein 梅県 kin

広州 kem 陽江 kiem 厦門 kin 潮州 kim 福州 kin 建甌 kein

中古の牙音 (舌根音) が保たれているのは、客語・粵語・閩語であり、官話・呉語・湘語・贛語では舌面音化している。この傾向は北京大学中国語言文学系語言学教研室1995 や中國文字改革研究委員會1954 を通覧しても、ほぼ全般的な事象と認められるので、カ行主としてキで写された唐話の原語を呉語と想定することはできない。

【§6.3. の補説】

まずは表記法の問題であるが、教キヤ・ウ、教キヤ・ウの二通りの書き方が見られる。しかし前者の黒丸はここ一カ所にしか見られないので、単に白丸が潰れて黒くなったものであろう。片仮名内の丸符号としては白丸だけを認めればよい。

見母と溪母の違いは無気音と有気音であろうが、これは仮名では区別できないので、いずれもキで写されることになる。群母は前二者が無気音であるのに対して有気音であるから、ギで写されることになる。俱・強はキで写されているが、これが群母であるのかどうかは再検討を要する。

また見・徑・鑑がケで写されているのは、韻母との関係によると思われるが、他資料と合わせて全体的な体系として理由を求めねばならない。

また疑母の字が常言の項には少ないが、岡田 1999:111 には二字話の部に疑ニイが5例あることが指摘されている。これは鼻音であることが認識されていたことを反映するものであるが、仮名書きの範囲では舌尖音のニと区別できなかったためである。

以上を総合すれば、なお他の長音部位の漢字との体系性を確認する必要があるが、取り敢えず大雑把ではあるが、〈全清キ 次清キ 全濁ギ 次濁ニ〉といった対応関係が予想される。

#### 6.4. 方音の同定へむけて

我々の資料の仮名書きの言語が呉語である可能性はほぼ否定されたが、それでは牙音を保つ方音のいずれであろうか。賢ヒエン (102) というのがあるが、先程の北京大学・・・・1995 にはこの字は登載されていない。代わりに同じ匣母の字で閑ヒエンが岡田 1999:113 に3例報告されている。これを北京・・・・1995: 531 で検索すると次のようである。

##### 【表4】

北京 ciɛn 済南 ciæ 西安 xæ 太原 cie 武漢 ciɛn 成都 ciɛn  
蘇州 hiɛ 温州 fia 南昌 han 梅県 han  
広州 han 陽江 han 厦門 iŋ 潮州 oi 福州 eiŋ 建甌 aiŋ

ヒという仮名は介音iを予想させるが、直音でもキで写されていたことを思えば必ずしも介音は必要条件とはならない。呉語の声門摩擦音は有声であるからこれも排除される。あとは湘語・贛語・粵語が残り、閩語はゼロ声母になっている。

最も難しいのは日ジ (48, 50)、シ (48) である。北京・・・・1995: 19では、

##### 【表5】

北京 zi 済南 zi 西安 a 太原 zə? 武漢 u 成都 zɿ 合肥 zə?  
揚州 la? 蘇州 niɿ? 温州 ne 長沙 zɿ 双峰 i 南昌 nit 梅県 nit  
広州 jet 陽江 jet 厦門 lit 潮州 zik 福州 ni? 建甌 ni

シ (48) は恐らくはジの誤記であろう。仮名書きは入声音を写すことには何らの意を用いていないので、そのことを考慮にいと、潮州 zik が一番近い。しかし日母の字を精査する必要がある。

#### 6.5. 振り仮名中の付加符号

岡島冠山を初めとして、唐話語学書の著者達は振り仮名の限界を知りつつもそれなりの正確さをも期して、付加符号をいくつか便法として用いている。例えば膠キヤ・ウ (23) というのがある。高島 1991: 84 はこの符号に言及している。

「ニヤ○ウ」「テヤ○ウ」の「○」は、介音（語頭子音と母音とをつなぐ音）をあらわす印ではないかと思う（あるいは日本語の「ウ」よりもせまい母音であることを示すか?）。

断定的な書き方をしていないのでよいのであるが、介音であればニやテの直後の置かれている筈である。介音は拗音のヤが担っている。常言の項では用例が少ないので、岡田 1999

を参照すると、カ・ウ、キヤ・ウ、ケ・ウ、サ・ウ、スヤ・ウ、ヅア・ウ、テ・ウ、デヤ・ウ、ナ・ウ、ハ・ウ、ヘ・ウ、ミヤ・ウ、リヤ・ウ等々があり、介音があってもなくても用いられているから、介音とは関係の無い符号である。

#### 6.6. 同時代資料の証言

石崎 1940: 15-18 には『朝野雑記』に記録された長崎通事唐話会（享保元年十一月二十二日）の記録があることを紹介している。これによるとそこでの問答は福州話・漳州話・南京話の三方言でなされたという。この記録にも振り仮名が付いているので、それを詳細に検討して三方言との関わりを考察する必要があるが、今はその暇がない。

木津 2000.3: 656 も同じ箇所と言及し、ここでいう漳州話は厳密な意味での漳州話ではなく、しばしば泉州話が指す内容と重なっているため、この両者は明確には区別されてはいなかったとする。つまり閩南語という括りで捉えられるものである。漳州・泉州話を原語とするとされるこの記録の振り仮名は『唐話纂要』のものとは同一ではないが、相互に意思疎通が可能な程度の距離である。

木津 2000 は長崎通事のマニュアルであった『唐通事心得』の訳注であるが、その IV-三に「人善人欺天不欺、人悪人怕天不怕」という諺が引かれている。これは『唐話纂要』の常言の62番63番の変形である。唐話資料は相互利用があったようであるが、これは唐話文献の全容に通じていないと、その実態を把握することは困難である。

#### 7. 翻刻作成に向けて

以上は葦の髄から覗く式の観察であったが、それでも振り仮名の分析にはまだまだ残されていることが多いことがわかった。しかも常言の項は殆ど手つかずとっていい状態である。原文を書き下しにしたもの、或いは和訳したものが日本語諺として通用していたかどうか吟味の対象となる。ここに江戸期の諺資料を更に持つことになる可能性があるわけであるが、いずれにしても諺研究者に残された課題は大きい。

#### 8. 参考文献

- 北京大学中国語言文学系言語学教研室 1995 『漢語方言詞匯』（第二版）北京：語文出版社
- 何曉麗 2007 「唐話資料における句読法——冠山の唐話辞書を中心に——」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』21(1), 1-15.
- 石崎又造 1940 『近世日本に於ける支那俗語文學史』東京：弘文堂書房
- 木津祐子 2000.3 「唐通事の心得——ことばの傳承」『興膳教授退官記念 中國文學論集』（東京：汲古書院），653-672.
- 2000 『『唐通事心得』訳注稿』『京都大学文学部研究紀要』39, 1-50.
- 香坂順一 1963 「『海外奇談』の訳者——唐話の性格——」『人文研究』14巻7号（1963.8）,

- 583-618 = 『白話語彙の研究』(東京:光生館,1983),437-465.
- 林武實 1988 「岡嶋冠山著『唐話纂要』の音系」尾崎雄二郎・平田昌司編『漢語史の諸問題』(京都:京都大学人文科学研究所),173-205 cum 331.
- 松村恒 2009 「明代白話小説中のことわざ的表現 漢文成句から中国語諺へ」『国文学 解 釈と鑑賞』74巻12号(2009.12),49-58.
- 中田喜勝 1978 「日本に於ける華音の声母「ツ」・「キ」について」『長崎大学教養部紀要・ 人文科学』18,218-229.
- 中村春作他編 2008 『「訓読」論——東アジア漢文世界と日本語——』東京:勉誠出版
- 中嶋幹起 1979 『福建漢語方言基礎語彙集』東京:東京外国語大学アジア・アフリカ言語 文化研究所
- 岡田袈娑男 1999 「『唐話纂要』<二字話>部の語彙構造——ピンイン順索引・唐音別単 漢字音表——」『立正大学文学部研究紀要』15,77-115.
- 奥村佳代子 2007 『江戸時代の唐話に関する基礎研究』(=関西大学東西学術研究所研究 叢刊 28)吹田:関西大学出版部
- 六角恒廣・横山宏 1975 『中国語への道』東京:大修館
- 高松政雄 1985 「近世唐音弁——南京音と浙江音——」『岐阜大学国語国文学』17,92-110.  
—— 1985.7 「近世的唐音の音体系——江南浙北音としての——」『國語國文』54巻7 号[611号](1985.7),20-39.  
—— 1986 「近世的唐音の音体系——その二、韻母の面よりの考察——」『國語國文』 55巻6号[622号](1986.6),9-19.
- 高島俊男 1991 『水滸伝と日本人 江戸から昭和まで』東京:大修館
- 王順洪・名和敏光 2006 「日本中国語教育的道路」『山梨国際研究』(山梨県立大学国際政 策学部紀要)1,19-29.
- 藁科勝之 1982 「『字海便覧』における注釈の方法とその日本語——岡嶋冠山の唐話辞書 の考察——」『武蔵野女子大学紀要』17,97-110.
- 中国文字改革研究委員会 1954 『全国主要方言区方音对照表』北京:中華書局

### III. 近刊中国語諺本をめぐって

1. わが国の諺のみならず成句・漢字熟語の多くは中国語起源のものが多い。中国語といっ てもそれは古典中国語、いわゆる漢文と言いつわされているものである。日本語は中国語 の大きな影響化のもとに発展し、語彙・句を借用して表現を豊かにしてきた。そのため漢 文の故事成句に関する辞典・解説の類は汗牛充棟をなすといっても過言ではない。しかし 現代中国語の諺・成句の解説本となるとその数は激減し、あるいは英語のそれにも届かな いかもしれない。日本からみる立場からすると、漢文と現代中国語の間には文化的な断絶

がある様である。しかし古来の漢文成句は明清の白話小説中のそれを經由して現代中国語の中に流れ込んでいる筈であるから、現代日本の我々は現代中国語の成句表現に目を向けることは重要である。中国ではこうしたツールは多数出版されているが、中国学の専門家でなければそれらを自由に利用することは容易ではないので、日本語で日本人を対象として書かれる中国語の諺解説は極めて貴重である。本年に新しい感覚で著された次の書はこうした意味で歓迎される著作である。

千野明日香『中国のことわざ』(=あじあブックス 068) 東京:大修館, 2010.

著者は中国の昔話の研究にも携わる人材で、民俗学の素養をも備えている点からして、諺を語るのに相応しい中国学者である。内容は八十程の諺を採り上げて、実際の中国人の言語生活の中で使われている場と意味を書き留めたもので、スタイルはエッセイ風ではあるが、辞典の意味・用法の一項を構成し得る情報を提供している。大部分が1990年代以降に著者が直接に交際のある中国人の使用例を記録したもので、いわばフィールドワークノートである。実際に言及されている諺の数は、項目内で異形や類似形にも言及しているため、八十よりかは大分と多く、それらは巻末に索引でまとめられている。索引に登載されている諺数は200を越えている。平均的個人が使う諺のミニマムは200を越えることはないだろうから、従って小さな諺辞典の役割をも果たしうるものである。しかし辞典を編む意図で選定された形跡はないので、頻度の高いものから200が選ばれたのではない<sup>10</sup>。更に良いのは日本語引き索引も付いていることである。日本語で意味を考えながら検索すれば中国語原文にたどりつけるという工夫である。

各項目は問題のある諺は長く、簡単なものは短くといったことはなく、ほぼ一定の量が割り当てられている。これは大半が雑誌の連載記事に由来するからである。コラムニストと言ってもよい程著者の筆遣いは巧みであり、読む者を飽きさせない。時には人生を深く再考させるよすがとなる文章もある。しかも終わりの部分に何らかの関連を持つ和歌を引用して、教養の広さを示している。更には索引の直前には関連文献のリストがあり、中国諺の研究を志すものへの情報を提供して形を整えている。

2. 本書の長所を挙げると以上の通りであるが、読者対象をどこに置いているのかということをも考え合わせると望むべき点もある。本書が収められているシリーズはかなり中国に傾斜しているので、中国へ強く関心を寄せる人々、特に中国学を志す若い世代をターゲット

\*10 諺の頻度を測る便法として、諸諺辞典に採録されている度数で計るといったものがあつた。これは国内のことわざ学会で提示されたときも、二次資料のそれぞれの性格を検討することもなくそのみに依るこの方式には多くの疑義が寄せられた。2010年11月に国際諺学会でもそれらの疑義を踏まえず再度発表されたが、チェコのチェルマク、エストニアのクリクマンという今日の主導的な諺学者から厳しく批判を受け、何の反論もできなかった。既存の辞典のみに依拠するこの安直方式は完全に否定されたといつてよいであろう。

トとしているであろう。そして書題に〈ことわざ〉を掲げるからには、諺研究者をもそこに含んでいるであろう。以下にそうした読者の立場を想定して、自由にコメントを書き連ねてみよう。

2.1. 先ずは前者の場合であるが、各項目の題の次に、中国語原文と日本語訳が与えられている。諺本には外国の諺を紹介する際に、極端な意識をしたり、対応する日本語諺を挙げるだけのものが往々にして見られるが、そうしたことはなく、原文の理解に資する様な訳が与えられている。直訳から逸れている場合でも本文冒頭に説明が与えられている（例えばp.62）。惜しむらくは拼音字母が与えられていない。諺には音声の上で技巧を凝らしたものがあるので、原音で発音するための手引きは必要である。縦組みの制約もあったろうが、索引の部で付けるという方法もあったろう。次には和訳に伴って、原文の語法解説を僅かでも入れた方がよかった。中国語学習者のためのみならず、諺には語法上の特徴を有するものが多いからである。この問題を組織的に説いたものは少ないが、栗原成郎「ロシア俚諺語法の研究」(1) - (5)『創価大学外国語学科紀要』8 (1998) -12 (2002) という大部のものが諺の語法研究だけで成り立っていることを思えば、その重要性は納得できよう。五字二句から成るものもあり（例えばpp.60, 62）、修辞上の問題にまで言が及べば、現代中国語も古来の漢文成句の形式を受け継ぐ土壌を持っていることへの理解を助けることにもなる。

2.2. 後者すなわち諺研究者 (paremiologist) の立場からは多々要望がある。諺本であるからには、扱われている対象への一般的な論述がどこかにほしい。諺一般については「はじめに」の中で僅かに触れるに過ぎない。そこでは諺のアノニマス性・口承性を言うに過ぎない。藤井乙男の『俗諺論』を引いて、ジェームズ・ホーウェルが諺を研究したばかりか、創作もしたが、それは後者に一つも伝わらなかったという。英語諺研究史の中で James Howell の名は逸することのできないもので、*The Oxford Dictionary of English Proverbs*, 3rd ed. (Clarendon, 1970) [4版もでていますが3版の改訂版とは言い難いので、なお3版が定番と言ってよい] の用例の項を眺めれば、随所に Howell のそれを見出すことができるので、一つも伝わらなかったというのは暴言である。藤井は近代日本にあって学問的な諺研究を創始しようと努力した人である。辞典は Bohn に範をとり、研究は Trench の影響を受けている。ただその後藤井の志が正当に受け継がれて諺学が発展していったかという、そうとは言えない面がある。しかしそれは却って藤井の重要性が増すので、その意味で藤井への言及があるならば、マージナルな発言を引くのではなく、藤井の研究全般に少しく行を割いてもよかったであろう。

3. 本書の一番の長所は、著者自身が同時代の中国人の知己の実際の使用に基づいて書き記した点である。その点で記述はすべてファーストハンドであるが、その分書承の部分で避けられている印象を受ける。例えば70頁の送君千里、終有一別という項では「バリエーションはほとんどなく、表題の形で使われる」とある。たしかに著者が耳にした限りにおいてはその通りなのであろう。しかしこの諺は白話小説時代から使われているものであり、

異読が見られる。『水滸伝』二十三回では「送君千里、終須一別」とあり、三十二回では「送君千里、終有一別」とヴァリエーションを示している。この異同は字義的には殆ど意味がなく、それぞれ口承であるから、発言のたびに揺れがあることを示しているのであろう。話は逸れるが、前者はいつまでも見送りとして付きそう宋江に武松がもう送らなくてもいいよ、という場面での発言である。後者は今度は武行者に送られている宋江が口にしたものである。諺を使うのはしゃれた会話である。自分が言われた経験を基に、次には宋江がちゃんとそれを利用しているところに文学の面白さがある。昨今の語学学習の部門には文学離れが著しいが、諺は言語文化の一単位である。そこからテキストというより大きな単位への広がりの可能性を説くことも語学教育のひとつの柱となろう。なお揚げ足取り的で恐縮であるが、「ここ（scil. 浙江省のバス発着所）から杭州まで約九時間」というのはおかしい。北京までの誤植ではないだろうか。

4. とはいえ諺は定型化した表現を継承していることが多く、しばしば古語の表現をとどめている。日本語でも諺には文語調のものが多く、著者も古典との関わりが重要であると考へて、129-148頁に「古典とことわざ・古典の言葉」という一章を設けている。この部分は中国語諺の一部が古典文言文に由来する証拠になるので、とても興味深い。その場合には現代の生きた用法の記述を主眼としていても、古典の出典の記載、意味が古今で同一かどうかの吟味が期待される。

5. 以下は個別的問題を頁数を挙げつつ論じるものである。

130頁の「熟読唐詩三百首、不会吟詩也会吟」は表題の諺自身が古典学習の有効性を説いている。訳は「唐詩をたくさん覚えれば・・・」となっているが、この句の出典は本書には記されていないが、清の蘅塘退士が自身の編纂になる『唐詩三百首』に付けた序にでてくるものである。しかも注目すべきは「諺云：‘熟読唐詩三百首、不会吟詩也会吟’」と書かれていることである。ここの唐詩三百首は自身の編纂本を指して、これを読めば詩を詠めるようになります、と宣伝をしている。しかもその宣伝文句に権威を持たせるために、諺云と付記しておちゃめをしたのである。だから和訳は「この『唐詩三百首』をしっかりと読みになれば」としないとその面白さがでてこない。

136頁の「青出於藍勝於藍」は日本でも出藍の誉れという日本語の句になって、よく知られているものである。中国でも「青出於藍」という短縮形で辞典の見出し語になることが多い。「出典は『荀子』。成語に分類される。・・・現実の語感は諺に限りなく近い」とあるが、<成語><諺>に関してその区別が説明されていないので、この文章の意味はわからない。中国でも成語辞典にも諺語詞典にも登載されているので、その区分は不分明なのだと思う<sup>11</sup>。『荀子』勸学の文章は見出し形とは同一ではない。『荀子』の本文にもテキストにより異読があるが、見出し形と同一のものはない。更に青云々の直後に氷が水より冷たいという句が後続する。この二つの句を踏まえて『桓譚新論』崇学は意味を解説している。「青は藍より出でて而も藍より青きは、染然ら使むる也。氷は水より生じて而も水より冷たき

は、寒然ら使むる也」染とか寒とかいう強い原因があれば、本来の属性以上のものになる。だから人は精進せよということである。本来の属性以上、という点から師匠を超えた弟子という意味も派生してくる。従って「本来の意味を踏まえた上で、ウイットに富んだ使い方をすることが多く」という文は、もう少し敷衍して述べないと誤解を招く恐れがある。また漢語学習者のために「於」の用法解説も欲しいところである。

この項目の後半には別の句の紹介があるが、青は・・・とは直接関係のあるものではなく、古典文献に由来するものということで同じ項目内にまとめられているようである。諺・成句の場合には現代語の中に文言がそのまま使われることがあると強調してもよかったであろう。

[質問というか疑義が提出されました。お答えしなくてはいけないのですが、ざっと書き終えているのと、結論部ならびに全体の趣旨とも関わることでもあるので、分割連載を一通り終えたところで、補足したいと思います。]<sup>12</sup>

\*11 筆者は諺と金言や成句などとは明確な境界線が引けないと考えている。それぞれのジャンルのプロトタイプがあり、そこから濃く、やがて淡く広がりを見せている構造をとっていると考え。従って、諺であり、同時に成句であるということもあり得るので、特定の句をいずれかに強引に配当するという行き方には賛成しない。この問題はいずれ正面切って論じなければならないと考えている。

\*12 元来はネット掲示板に連載でアップしたもので、途中で反応があることがある。この段階で重要な質疑が出された。これを記しておかないと小論の第8節が理解不能になることと、過去ログ集の出版が怪しいので、この疑義の文を次に転記しておく。

Howell の創作ことわざ 投稿者：しんちゃん 投稿日：2010年 3月15日 (月) 12時09分18秒 編集済 >ぶりんす 千野明日香『中国のことわざ』、面白そうですね。残念ながら、まだ入手していませんが、学会でも千野さんにお話しいただく機会があればよいと思っています。ところで、ぶりんすがこの本を論じて、次のように書かれているなかで、少し気になった点があります。「藤井乙男の『俗諺論』を引いて、・・・(本文中にあるので中略)・・・というのは暴言である。」藤井の『俗諺論』には、「ホウエルは、俚諺の研究に熱中し、専ら俗間の俚語、先哲の格言を集むるのみを以て満足せず、自ら格言五百語を新作して、後世の諺とならむことを期待したりき」(21ページ)とあります。そして、具体例を挙げ、「～の如き、稍見るに足るべきものありしも、ホウエルの希望は全く水泡に帰して、一句として世に流伝せしものなく、せつかく苦心の警句も、空しく自家の庫中に朽腐して、世間通用の重宝たるを得ざりき。諺の人工を以て製出すべからざるや、此の如し。」と書いていました。つまり、藤井が「一句として世に流伝せしもの」がないと言っているわけです。さて、ぶりんすの「Howell のそれ」が創作ことわざを指すとすれば、このような藤井の見方とはっきり対立するものではないでしょうか。だとすれば、Howellの創作ことわざで、ODEPに収録されているものを例示すべきではないでしょうか。Howellがことわざ研究史の上で重要であり、藤井もまた日本のことわざ研究の偉大な先駆者であったことはまことにそのとおりだと思いますが、この文脈で、「随所に Howell のそれを見出すことができる」というのは、少なくとも具体例を挙げないと論議にならない気がします。

166頁の「回光返照」にはもとの意味はトワイライト、今の意味は滅びるまぎわの一時的な盛り返し、と説明がある。後者については実際の口頭での用例に基づいているので、問題のないところである。原義については困難な問題がある。これはあまり諺辞典に収録されていない。これは禅語である。『臨濟録』示衆一二にある。「你言下便自回光返照」とあるが、とにかく禅籍は理解が容易でない。外国語訳を参照してみよう<sup>13</sup>。

西翁演義 p.231 : 그대가 언하에 문득 스스로 회광반조 하여  
これでは漢字熟語を仮名書きしたのと変わらないので、日本の書き下しと同じでさっぱりわからない。フランス語訳を見てみよう。

Demiéville, p.149: Sous cette parole, retournez votre lumière, introvertissez votre vision.

光を自己の内面に向ける、という意味らしい。回の字は、外からくる光（ここでは師匠の言葉）を転回させて自己を照らす光にすること。これには同じ書の中に関連する表現がある。示衆一に、「你自返照看」というのがそれである。Demiéville, p.65 を参照すると、"Essayez donc de retourner votre vision vers vous-mêmes!" とある。自分自身に光りに向けて観察せよ、ということらしいが、この場合光を向ける先が自己か、或いはもうひとつの自己[とと思っているもの]かは論議のあるところであろう。いずれにしてもトワイライトではない。日が完全に沈む前の短い明るさと考えると、今の意味と通じるような気もするが、一時的な盛り返しではない。白話小説の段階では、一時的な盛り返しの用法が認められる。

『紅樓夢』九八回：此時李紈終見黛玉略緩、明知是回光返照的光景。

46頁の「夫妻本是同林鳥」は夫婦の絆の脆さを言うものとされ、古い用例としては明の小説が挙げられている。それに『喻世明言』巻一を加えれば三言が揃う。用例はもう少し遡ることができる。宋代無名氏『張協状元』「夫妻本是同林鳥、大限来时各自飛」や元代無名氏『馮珠蘭』二折「正是：夫妻本是同林鳥、大限来时各自飛」この句の形は取っていないが、内容的には同一のことをいう表現が『法苑珠林』巻五二（大正蔵 53.676c）に見られる。これは引用であり更に『五無反復経』（大正蔵 17.573c）に遡る。インド語原典は見出されていないが、とにかく発想はインド起源である。この発想を伝える物語はラフカディオ・ハーンにより再話され、『異文学遺聞』中の「仏教例話」となっている。これについては、「ハーンの翻訳・再話手法」『ハーンの文学世界』（＝講座 小泉八雲 II）（東京：新曜社，2009），521ff. を参照。以上の古典の用例を勘案すると、夫婦関係の脆さを一義的に言ったものではなく、夫婦関係に託して、世の無常を説いたものであることがわかる。

34頁の「女大十八変」はかねてより難しいと思っていた。本書の用例では、高校生くら

\*13 西翁演義『臨濟録』（서울：東西文化院，1974）；Paul Demiéville, *Entretiens de Lin-tsi* (= Documents spirituels, nouv. ser.) (s.l.: Arthème Fayard, 1972) .

いの娘に対して言っていたというから、「年頃になって綺麗になった」という誉め言葉で使っていたようである。類例としてはもっとはっきりと「美人になった」と明示されているものがふたつ挙がっている。しかし著者の観察は鋭く、この句の暗い部分も見落とさなかった。最近元気のない女子学生のことをこの句で表現した先生の例を引いている。この諺には正負両面が備わっている。この負の面は辞典等には明記していないようである。ところで「十八変」であるが、少女の成長過程で「十八回変わる」としている。もちろん正確に「十八回」ということではなく、よく変わるという意味を想定しているのであろうが。我が国でも十八変化、より多くは七変化とも言うが、これは十八とか七とかの数を問題にしているのではなく、いろいろとといった意味のようである。十八変という言葉の起源は古い。『易経』繫辭伝上に

是故、四營而成易、十有八變而成卦、八卦而小成

とある。『易経』は超難解である。占いの技術論から宇宙論に関わる壮大な議論までが籠められている。また儒教の経典としての属性もある。上の文は占筮の法に関わることであり、取り敢えずの意味は、四營することは一変、三変して爻を得る。また各卦は六爻から成るから、卦を得るためには三変の六倍即ち十八変を要するということである。その本当に意味するところは筆者にはまるでわからないが、ここから派生した諺レベルでの十八変の用法は、もちろん数字の十八ではなく、卦を得るためのひとつのプロセスが終了したという様な感じであろう。女性もプロセスを経て卦を得る、すなわち一定の段階に到達する、といった意味だったのだろうか。このあたり易経の理解が及ばないので、筆者にはわからない。それから、鬼も十八番茶も出ばなからの連想であろうか、女の子も十八歳にでもなれば大いに変わる、と解説してあった本を見たような気がするが今はその書名が思い出せない。女大が女が年頃になることを意味しているのは問題はない。「女大不中留」という様に、女は年頃になったらいつまでも家に留まっていたはいけない、という諺もある。フェミニズムのおばさんが目をつり上げるといけないので、次の用例も挙げておこう。

『三国演義』五十四回：男大須婚、女大須嫁、古今常理

『喻世明言』卷四：常言道：男大須婚、女大須嫁

『児女英雄伝』二十三回：我便説：男大須婚、女大須嫁、這是人生大礼

同 二十五回：経云：乾道成男、坤道成女、乾坤定而后地平天平；女大須嫁、男大須婚、男女別而后夫義婦順

『平妖伝』二十二回：常言道：男大当婚、女大当嫁

結婚すべきかどうかという問題はともかくとして、男も女もと言っているのです、少なくとも男女差別はない。もっとも『児女英雄伝』には他に男女差別っぽい成句がいくつかでてくるが、女性が主人公の作品らしく、それに反対するコンテキストで引かれている。「女大十八変」に話を戻すと、『紅樓夢』七十八回に「俗語又説：女大十八変」とある。これは、宝玉の部屋づきの晴雯が種々の意味で悪くなってきたので、暇を出した王夫人がそれを買母

に報告した。買母があの娘はいい子だったのにねえ、と言うと王夫人はすかさずこの諺を言う、というコンテキストで使われる。つまり悪く変わったことをいっているのです、上で述べた暗い部分に相応した用例である。しかしやはり年頃の娘は可愛いというのが典型的な例であろう。『清平山堂話本』雨窗集上・花灯轎蓮女成仏記に「従来道：“女大十八変。”這女娘子方年一十七歳、變得大有顔色」とあり、十八が歳を言っているととられかねない面を持つ用例である。

108頁の「国民党養土匪、共産党養白皮」は貴重である。本書が著者自身の採集に基づいている長所が発揮されている例である。他の類書には見つからないだろう。だいいちこれは大陸でも台湾でもおおっぴらには言えない文句である。著者は「諺ではない」と言っているが、諺の属性のひとつにある程度の伝承の長さを想定しているからであろう。庶民がこっそりと言いついていたら、いつの日にか諺になるかもしれない。対句形式という修辭技巧を用いている点では資格を具えている。庶民にとっては、アカも帝国主義も関係なく、弱者に優しい政治を望んでいることを反映している句である。

諺には寓意のあることが多いので、その点で寓話と機能が重なり合うことがある。寓話と諺がセットで語られる場合、その両者の関係は問題となる。この問題は論じられることがしばしばであったが、次の書と最後の書誌にそれがみられる。

G.L. Permyakov, *From Proverb to Folk-Tale: Notes on the general theory of cliché*, tr. by Y.N. Filippov (Moscow: Nauka, 1979); Pack Carnes (ed.), *Proverbia in Fabula: Essays on the relationship of the proverb and the fable* (New York: Peter Lang, 1988); Yumi Matsumura, "A Bibliography on "Proverbs and Fables", 『ことわざと寓話』(第15回ことわざフォーラム)(東京:ことわざ研究会, 2003)

本書には諺の説明のために、諺より後の昔話が結びついた例が指摘されているが(113頁)、これは貴重な例である。また諺には地方性のあるものがある。方言をからかう諺の例もあるが(120頁)、133頁に「真三国、仮封神、一部西遊騙死人」が古典作品の論評として挙げられている。古典を対象としているので全国的に通用する諺だと思っただけだが、千島英一『広東語圏のことわざと文化』(東京:東方書店, 2008), No. 677 = p.368 に「真三国、仮水滸、大話西遊」がある。書名に異同があるが、ほぼ同じもので、広東語圏特有のものかどうか疑問が残る。これは地方の諺、方言の諺を扱う際に常につきまとう問題で、どこまでが地方特有なものかを判定することが極めて困難な場合が多い。特に中国の場合は、方言は多いしその差も大きい、書けば同じだと主張する中国人が多い。実際はそうではないのだが、漢民族のアイデンティティという意識を示すもので、こうした発言はとても興味深い。ただ書かれた方言資料というのは極めて少ない。日本の場合も意図的に方言文学を作るといった目的で書かれた作品しかないようである。ポップスの場合F4の歌詞で台語歌詞のものもあるが、すべてを漢字で表記できずに、注音字母が混じっているものがあった。また香港でみた『孔雀王』の吹き出しには明らかに粵語が使われていた。こうした資料はとても

貴重であるが、その中に諺が見出されたら、砂中に金を見つけたようなものである。

6. 個々の諺について議論するときりがないので、全般的な要望へと進もう。著者は196頁以下に中国諺のブックリストを掲げて、更なる研究に資する配慮をしている。ただ中国語の文献については『二十世紀的漢語俗語研究』に譲ってしまった様子があり、残念である。著者が基本文献と思うものを、重要度の順から挙げてもらいたかった。これでは1999年以降のものがトレースできなくなる。2004年刊の『中国諺語大全』は極めて重要だと思うが、挙げられてはいない。それよりも著者は中国語の専門家であるから、中国の諺研究の概要を記してもらえば、シノロジーの外の諺研究者を益するところが大きかった。たとえば朱介凡の諺研究は重要であり、われわれの知りたいところである。『中国諺語論』の他にも種々論文などがある様であるが、手に入りにくい。また仮に入手できたとしても筆者などには読破することが困難である。中国学の専門家には是非、中国の諺研究の概況とその内容を非専門家にも開放して頂くことが強く望まれる。なお123頁に朱介凡は台湾の研究者とある。たしかに台湾で活躍した人であるが、湖北武昌の生まれである<sup>14</sup>。こうした背景により彼の地方諺への関心が了解できる。

中国でも諺や成語を区別しようとする試みがあるが、中国での区別がいかなるものであるかを知ってこそ本書の記述が理解できる面があった。温端政『漢語詞滙学』（北京：商務印書館、2005）、157ff.に『左伝』を例として、「諺曰」で始まる引用を集めている。今日考えられるような「諺」と完全同一ではないかもしれないが、漢文成句と呼ばれるものとはもう少し違っていて、より民間に言い習わされているニュアンスが強い。白話小説で「俗語説」で導きだされているものに相当に近い。日本やその他の国での区別と合致するか否かの問題よりも、中国人研究者がどのように理解しているかを知ることは、中国諺を観察する上でより重要である。

7. さて先延ばしにしてきたが、疑義（第6節註）に応じておく必要がある。ODEPの初出に Howell が挙がっているものとして、「ことわざ掲示板」の692306（=過去ログ集 XVII.13）にて、No weeping for shed mild を挙げた。ただしこれが Howell の創作かどうかを確かめることは現時点で筆者にはできない（v. infra）。初出の例をほかに挙げても、その問題がクリアできないので意味がない。従って Howell 創作諺云々ということについては、お詫びして撤回する。ただし創作ではないということも現段階では確かめられない。これが創作ではないという確証がないと、Howellの諺が亡びたとも言えないわけである。千野氏の「はじめに」について触れた文は舌足らずでわかりにくかったことも疑義を生む原因であった。千野氏が藤井の文を引いたのは Howell のものについて云々という意図で

\*14 『台湾俗諺語典』という大部の著作を完成された陳主顯博士とは2009年、2010年の国際諺学会で会見する機会を得た。話が朱介凡に及ぶと、彼は大陸出身者だから自分とは違うという言い方をされていた。こうした微妙な点に至ると、我々外国人には理解が困難な面がある。

はなく、諺の属性のひとつにアノニマスということがあることを言うためであったと思われる。本書の中には作者名のわかる漢詩の一部が見出し形になっていることもあるが（例えば138頁）、引用の次の文はそのことをも言っているのであろう。作者名がわかっているにもかかわらず、人口に膾炙するうちに作者名を意識しないで諺となる、という説明である。いろいろある名句が淘汰されてやがて諺になるということらしい。ただ完全に作者不明詠み人知らずかということはまだ保留されるかもしれない。諺と極めて近い口承伝承に所属するものに伝承童謡がある<sup>\*15</sup>。イギリスのナーサリー・ライムズは我が国でも随分と知られるようになったが、その中でもとりわけ有名な「きらきら星」とか「メリーさんの羊」は作者名と共に記憶されている。作者名が伝わっていても、日本のマザーグース集には殆ど収録されている。作者名がわかるものは、もちろん主流ではないが、それでも完全に伝承文芸から排除するというのは行き過ぎであらう。

藤井乙男『俗諺論』はのちに若干の構成とタイトルの変更を伴って、何回か再刊されている（ことわざ研究資料集成 第6巻；更生閣；進文堂；厚生閣；京文社；講談社学術文庫；藤井乙男著作集）。今日よく利用されるとすれば、文庫本であると思われるが、千野氏は『俗諺論』から引いている。これは巻末の文献リストに『ことわざ資料叢書』が挙がっているので、この資料集の同類ともいえる『ことわざ研究資料集成』によるものと想像される。こうした資料集の刊行の意義がこうした所にも現れている。かくして本書のはじめにのiv頁には『俗諺論』からの引用があるが、趣意引用のためであらうか、縮められており、また現代風の表記に改められているところがあるが、それにより内容が変えられているわけではない。一応『俗諺論』自体から該当箇所を引用しておこう。

十七世紀の英國の作家ゼエムス、ホウエルは、俚諺の研究に熱中し、専ら俗間の俚語、先哲の格言を集むるのみを以て満足せず、自ら格言五百語を新作して、後世の諺とならむことを期待したりき。その語中には *Pride is a flower that grows in the devil's garden*（高慢の花は悪魔の庭に咲く） *Burn not the fingers to snuff another man's candle*（人の蠟燭をあかるくせうとて、自分の手を焼くな）の如き、稍見るに足るべきものありしも、ホウエルの希望は全く水泡に歸して、一句として世に流傳せしものなく、折角苦心の警句も、空しく自家の庫中に朽腐して、世間通用の重寶たるを得ざりき。

\*15 実は2010年の国際諺学会（於ポルトガル）で筆者は諺とナーサリー・ライムズの交錯する問題を扱う発表をしたが、失敗であった。ヨーロッパ人ならばナーサリー・ライムズ（日本とアメリカではマザーグース）は当然知っているという思い込みがあったが、イギリス人以外には全く未知の領域で、これの説明から始めなければ、理解不能であったのだ。自分でもかつて *К. Н. Атаровой, Стихи Матушки Гусыни*（Москва: Радуга, 2003）を唯一の例外として、日本を除く非英語圏にはナーサリー・ライムズの注解本・訳本は殆ど無いと書いたにも拘わらず、こうした状況を十分に踏まえなかったのは大きな手抜きであった。

(21～22頁)

(松村註：あかるくせうとては、消そうとして、であろう)

これは藤井の説ではないと思う。ハウエルの書というのは藤井自身はその書名は挙げていないが、次のものであろう。

James Howell, *ΠΑΡΟΙΜΙΟΓΡΑΦΙΑ: Proverbs, or, Old sayed sawes & adages in English (or the Saxon tounge), Italian, French, and Spanish, whereunto the British for their great antiquity and weight are added ...* London: Printed by J.G., 1659.

諺学習に入門したての頃、Howell と Heywood というHのイニシャルを持つ二人の人物は、英語諺の初期の段階に関わるらしいことを知ったが、あまりよくわからなかった。英国滞在中にも図書館で垣間見ただけである。後者はその後復刊本が出ていることを知り入手したが、前者は貴重書閲覧室で定められた閲覧机の上でちょっと眺めただけで、その全貌は理解していない。図書館の書誌情報では復刊本が出ているのかどうかはわからなかった。実は同じ頃ロンドンで開かれた国際古書市にでていたのだが、エラスムスのAdagiaとの選択に迫られ、両方ともというわけにはゆかないので、Adagiaの方を選んでしまった経緯がある。この次こうした場所に再び現れるのはいつか見当もつかないし、また現れたとしても入手できる可能性は極めて乏しい。英語のことわざ資料叢書でもでない限りは、自由な閲覧はなかなか難しい。こうした書を今よりも洋書の入手・閲覧が遙かに困難であった明治時代に藤井がじかに検当したとは思われない。藤井が見なかったと決めつけるのは失礼ではあるが、上の引用文に近い文章があれば、藤井はそれに基づいたのであると考える方が、その蓋然性は高そうである。その英文を引いてみよう。(少し長くなるが、上の引用文との関わりを示すために途中を省略しないで引いてある)

James Howell, a prolific English writer of the earlier half of the seventeenth century, one certainly meriting better than that almost entire oblivion into which his writings have fallen, occupied himself much with proverbs; and besides collecting those of others, he has himself set down 'five hundred new sayings, which in tract of time may serve for proverbs to posterity'. As was to be expected, they have not so done; for it is not after this artificial method that such are born; yet many of these proverbs in expectation are expressed with sense and felicity; for example: 'Pride is a flower that grows in the devil's garden'; as again, the selfishness which characterizes too many proverbs is not ill reproduced in the following: 'Burn not thy fingers to snuff another man's candle'; and there is at any rate good theology in the following: 'Faith is a great lady, and good works are her attendants'; and in this: 'The poor are God's receivers, and the angels are his auditors'. Yet for all this, it would be inaccurate to quote these as proverbs, (and their author himself, as we have seen, did not do more than set them out as proverbs upon trial,) inasmuch as they have remained the private property of him who first devised them, never having passed into general circulation; which until men's sayings have done, maxims,

sentences, apothegms, aphorisms they may be, and these of excellent temper and proof, about proverbs as yet they are not.

(Richard Chenevix Trench, *Proverbs and their Lessons* [London: George Routledge & Sons, 1905], 12)

藤井の引用箇所だけからは、藤井の意見なのかTrenchの意見なのかわからないが、Trenchの所論を簡略して述べたものであろう。だから Howell に対する文章は藤井独自の意見ということではなく、またそれに基づいて藤井が云々などと議論されても迷惑に感じるであろう。ただし付言しておかなければならないのは、引用された藤井の文は剽窃ということではなく、藤井は緒言で文献を列挙するうちでも最初に Trench の書を挙げている。今であれば引用部分の終わりに番号を付け、注としてTrench, p.12 とでも記すことであろう。明治時代には西洋の学者の意見を紹介するだけでも重要な貢献であったし、それすらも一苦勞であったろう。緒言には、我が国の伝統的な諺本の列挙と並んで、Ehemann (sic. for Ehmann), Wander, Christy, Bohn の書が挙げられているが、藤井のもともとのフィールドが国文学であったことを思えば、その努力には深い敬意を払わざるを得ない。これだけでも藤井が和洋の諺研究を合体させて、近代日本に諺学を打ち立てようとした心意気が窺える。Trench の書も藤井と同様に19世紀から20世紀にかけて近代的な諺学を打ち立てるべく努めたものである。上の書の初版は1853年で、タイトルも *On the Lessons in Proverbs* であった。(筆者がSOAS図書館で見たのは、このタイトルを持つ再刊本であり、初版本ではなかった<sup>\*16</sup>)。藤井が見たのはタイトルからして1905年の再刊本である。藤井がこの書から大きな影響をうけていることは、その章立てを見るだけでもよくわかる。両本の章立てを対照させてみよう。

The Form and Definition of a Proverb	諺の意義及び形式
The Generation of Proverbs	諺の発生及び変遷
The Proverbs of Different Nations Compared	諺の比較及び地方的特色
The Poetry, Wit, and Wisdom of Proverbs	諺の機智教訓及び詩趣
The Morality of Proverbs	諺と道徳
The Theology of Proverbs	諺と宗教

しかし藤井は Trench を写したとか翻訳したとかではなく、その結構は借りつつも、その中に和漢の諺に関する該博な知識を詰め込んだものである。日本の諺学の発生は本来的に比較諺学であった。これに関連して想起されるのは、上田敏の「伊曾保物語考」である。

\*16 なお Trench の書は (Hulme の諺本もそうであるが) Proverbium の補遺シリーズとしてヴォルフガング・ミーダー教授の解説文を伴って復刊されていて、今日でも参照が容易になっている。

Joseph Jacobs の成果に大幅によりつつも、日本のキリシタン文献並びに和漢の関連寓話を注ぎ込んで、イソップを世界文学として記述するものに仕上がっている。欧米の成果を継承しつつ、そこに東洋人の利点をいかしてそれを超えるものを作成しようとした意気込みがあり、どちらにも明治の学問草創期の荒削りではあるが、前向きの息吹が感じられる。私達はこの意気込みを失ってはならないと思う。

ただ Trench の Howell 評価にはやや不公平の感がある。本来 Howell は歴史家であり、諺収集は余技の様であった。本業の方でもそれなりの成果を挙げていたらしいが、Trench は諺に主眼を置いたせい、そちらをあまり評価していない。それが上の引用の言葉にも現れたのであろう。今日的评价は近年新版相成った *OxfordDNB* を参照すればある程度得られるであろうが、まだ閲覧するには到っていない。しかしアノニマスの口承を基本とすることは Trench も藤井も正しいし、それに賛成するものであるが、ただ口承という諺の属性を考えれば、それを排他的に推し進めるのではなく、多少の偏差を許容しつつ、フレキシブルに対処するほうがより適切である<sup>17</sup>と考える。

8. 疑義が提出されたので、議論が大分と脇道にそれたが、千野『中国のことわざ』は、口承を主体として項目を立ててあり、現代中国語で使われていることが保証されている。その点では趣旨一貫しているが、その中には、古い古典以来のもの、詩人名のわかっている漢詩の一部から派生したもの、白話小説に頻繁に用いられたもの、共産革命以降のもの等々が含まれ、諺が極めて多様な側面を持っていることを示している。わが国では漢文故事成句・名言のツールに比べて、中国語諺の集成本は少ないので、本書の有する意義は小さくない。江湖に勧める所以である。

\*17 疑義の提出者からも応答に対してのメッセージが寄せられたので、応答を完結させるためにそれも引いておこう。

興味深い脇道でした 投稿者：しんちゃん 投稿日：2010年 3月27日（土）12時02分13秒>ぷりんす 私の書き込みから議論が脇道にそれたようで、恐縮しています。しかし、その脇道はなかなか興味深いものがありました。とりわけ藤井の俗諺論の背景が Trench との関係で具体的に明らかにされたのは、大きな意義があると思います。藤井が近代のことわざ研究の先駆者であることは誰しも認めるところですが、その視野の広さに読むほうに対応しきれず、俗諺論とその改訂版『諺の研究』がきちんと読まれることはほとんどなかったといえるでしょう。1世紀の隔たりの結果、現代では読みにくくなった面もありますが、注釈をつけて再刊してもよい気がします。本筋のアノニマスの口承を排他的にせず、フレキシブルに対応することにも賛同します。